

副詞「よく」の評価性について

The Evaluative Criteria of the Adverb 'yoku'

川端 元子†

Motoko Kawabata

Abstract The adverb 'yoku' has mainly three purposes of usage that are 'degree', 'frequency', and 'evaluation', and the usage for 'degree' and 'frequency' are regarded as separate from the usage for 'evaluation'. These purposes of usage have been pointed out for their similarities with other adverbs, but on the other hand, it has been also pointed out that the difference in the usages were caused by the dilution of the original meaning and the difference in the degrees of the evaluation.

In this article, we reviewed the 'evaluation' of the adverb 'yoku' that was common in various meanings. First, from the differences of the adverb 'yoku' from other adverbs, we extracted the common points throughout all the usages of 'yoku'. Then, by examining the characteristics of 'yoku's usage for 'degree evaluation', we elucidated the structure of its 'degree evaluation'. Through these results, it was indicated that the basic meaning of adverb 'yoku' was the highness of the evaluation for the degree achievement attained against the set target. And it was elucidated that the one focuses on these standard is to be 'degree evaluation', and the one focuses on the expectation upon speaking is to be an 'evaluation adverb'

1. はじめに

副詞的機能を持つ「よく」には、大きく分けて程度、頻度、評価の三つの用法があるとされる。3つの用法は修飾される動詞句や内容によって異なる意味となって現れ、程度と頻度の意味用法の境界線が必ずしも明確でないことが指摘されてきた。さらに、結果の副詞、様態の副詞、程度の副詞、量や頻度をあらわす副詞、評価副詞など、さまざまに分類される他の副詞との共通点を持つ。

これまでの「よく」に関する考察は、日本語を母語としない学習者に生じやすい誤用の側面からとりあげられることが多かった。とくに、副詞的機能を持つ「よく」が初級で導入される基本語彙でありながら、程度や頻度の意味で用いたときに、その使い方において制約が多く誤用が生じやすいことが問題になってきた(近藤 1986¹⁾、森本 1992²⁾、そのため、「よく」の共起制限、「よく」が修飾する語句の、

性質やそれを通して読み取れる「よく」の表す意味についての考察が多かった。そして、それらの考察では、様態、程度、頻度の他の副詞と何が異なるのかという相違点を探りつつ、「よく」の特徴を捉えようとするものであった。

しかしながら、程度と頻度は「よく」の修飾される語句の意味によっては接近する。また、近藤(1986)が「共起動詞の性質だけがその意味を一意的に決定しはしない」としている。その具体例として「よく走る」をとりあげ、文脈によって別の意味に解釈できると述べている。

- (1) いつもこの道をよく走る。(頻度) ※近藤用例 83
(2) こんな雨の中をよく走る!(ムード) // 84

また、森川(2008)にも、頻度をあらわす「よく」の修飾する先はある動作や作用の実現として文を含めたものに拡大されることがあると指摘されている。

そこで本稿では、多様な修飾をして多義的な「よく」の特性を探るために、その用法の共通点から特性をとらえたい。このカギになるのが、森川(2008)ののべるような副

†愛知工業大学 基礎教育センター(豊田市)

詞的機能を持つ「よく」に含まれる実質的概念のあり方であり、「よく」の共起制限を生み出すとされる評価性の問題であろう。「よい」も、属性形容詞には話者がそのように読み取ったものを対象に本来備わる属性のようにしてあらわすという意味で、評価性をも含みもっている(宮島 1994⁴⁾)。その意味では、「よく」の評価性について再考することによって、「よく」の意味の違いを導く条件を探れるのではないかと考えている。

2 先行研究における「よく」の多義性とそのあり方

2・1 「よく」の各用法の概観

まず、「よく」の各用法の特徴を以下に記す。

程度をあらわすものは、森本(1992)が様態の副詞に近いとし、佐野(2006⁵⁾)が事態の実現度の高さをあらわすとする次のようなタイプである。

(3) 敵の攻め方をよく見て判断する必要がある。

(4) その帽子と洋服はあなたによく似合う。

これは「じゅうぶんに」などと置き換えることが可能であり、実質的意味の保持も大きいとされる。このタイプには、「高度に」「とても」という意味にも読むことができ、また「とても」「非常に」などの程度副詞に修飾される。

なお、程度をあらわすものには必ずしも「高度に」といった質的な高さをあらわさないものもある。

(5) 彼はよく働く。

(6) 彼は毎日よく食べてよく歩く。

上の例は「よく」が量の多さについて述べている(森本 1992、佐野 2006)ものである。このタイプは「事態の内側から事態の実現のされ方を限定し特徴づけている」(仁田 2002⁶⁾)ものとして、結果の副詞、様態の副詞、程度量の副詞らと同様の性質をもつ「あり方に関わる副詞」

(仁田 2002)と位置づけられるとされる。

頻度をあらわすものは、「一定期間内における、ある事象の繰り返し生起度数の多寡」(仁田 2002)をあらわすものうち、多頻度や中頻度をあらわすとされるものである。

(7) 最近この辺りでよく彼を見かける。

(8) 今日は彼女とよく目が合う。

これらは「しばしば」「ときどき」「しょっちゅう」などと置き換えが可能である。

そして、ムードの「よく」は「多くの場合に文頭(句頭)に位置して、後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との賛同といった話し手の評価・コメントをあらわす用法」(工藤 1983⁷⁾)をもつものに分類できるタイプである。

(9) よくこんな遠いところまで来てくれました

(10) さぼってばかりなのによくレギュラーからはずされないね。

多くは、賞賛や驚き、呆れといったものをあらわすが、この用法は文全体を修飾することができる点で他の用法とは異なる性質をもつ。そのため、「よく」のなかでは特殊な位置づけとなり、他と同列に論じられることがほとんどなかった。

これらの用法は、程度限定的なものうちの様態副詞的なもの→同じく量をあらわすもの→頻度→評価の順に、実質的概念の希薄化が進むとされている(森川 2008)。

2・2 「よく」の各用法にみられる共通点

これらの3つの用法は、今見たように多様な副詞との共通点をもつ一方で、それぞれ単純に置き換えられない例が少なからずある。そして、先にも述べたように出現する発話環境によって他の意味になることもある。その違いを生み出す条件については、これまでのところ十分に考察されていない。まずは、「よく」と他の副詞との共通点を見ておく。

「よく」は程度評価をする点で程度副詞と似ているとされるが、原義のもつ実質的な概念性は程度の差はあれ存在している。一方、程度副詞に分類されるもののうち典型的な程度副詞とされるものは、程度の大小をあらわす各語句がそれぞれの語句の有する尺度でもって程度スケール上で値を分け持って程度スケール自身を形成している。したがって、語句の意味は他の語句や基準との関係で相対的に決まる(川端 2012⁸⁾)。これは、程度副詞の実質的概念性が薄いことを示している。

また、命令・依頼文や意志・願望をあらわす文との共起制限がある点でも「よく」は程度副詞と似ている。これらの文であらわされる事態は未実現であるため、どれくらいかという具体的な程度をあらわして評価することができないというのがその理由である。程度副詞が未実現の事態について程度限定しようとする命令・依頼文において確定的な指示情報になれないが、文脈上で何らかの基準を読み取れる場合には、どの基準との異なり具合について指定することが可能になること(川端 2002⁹⁾)も、「よく」と共通している。工藤(1983)が述べるように、程度副詞がサマについての程度をあらわしてより客観的で様態副詞的なものから、コトに対する評価を述べる主観的で陳述副詞的なものまであり、主観的側面と客観的側面の二面性をもつことが、「よく」にも確認できる。なお、「よく」の実質的概念性の薄さは頻度の場合も同じである。

(11) 最近よく彼女に会う。

(12) これからは[*よく/ときどき/頻繁に]彼女に会いたい。

頻度の「よく」も命令・依頼や意志・願望をあらわす文での共起制限があり、その実質的概念性の薄さ、評価性の高さを証明するものとされる。

副詞「よく」の評価性について

また、頻度の「よく」は動作や行為の実現量と実現度数の両面から実現度合の高さが読み取れる場合に意味が接近する。

(13) ゆっくりよく考えて決めてください。

この例では、「じゅうぶんに」という意味と「何度も繰り返し」という意味の区別は大して意味がない。「日本語の頻度の概念は程度および量の概念から派生した、より高度な概念」(森川 2008)ということから、程度スケールの中身が程度か頻度かという違いはあるが、いずれも程度評価するタイプであるといえる。

2・3 「よく」の英文翻訳における課題とその意味 形容詞「よい」の意味として「品質や能力、人柄が優れている」ことや「正当だ」といった意味の他に、「規範や基準に合っている、適格である」ことや「目的にかなっている、好都合、ふさわしい」こと、「十分だ、整っている」ことなどがあり、対象の性質に対して積極的な評価をする(西尾 1972¹⁰⁾ものであるとされる。これから副詞化した副詞「よく」は、文脈と被修飾の語句のあらゆる動作によって完成したあり方の程度・量・頻度などに読みが分かれる。

このような「よく」の適切な訳語を機械翻訳において選定する条件の設定が容易ではないことが小倉(1998)にて指摘されている。小倉(1998¹¹⁾)では、副詞の機械翻訳における訳語選定の方式を確立するために、副詞と被修飾語句との関係から訳語選択条件を設定している。そのためのデータとして、研究者の新英和活用大辞典 35 版において英語に翻訳された副詞「よく」の 92 例の訳語を分類した結果、well が 42、often が 8、carefully が 5、better、closely、frequently、much が各 3 で、後は多様な語句が 1、2 例ずつであったとされている。これらの訳語はいずれも日本語のよくの各種の意味の類義語として比較される語句群であり、このように被修飾語句の意味によって訳語を選択することは、日本語の「よく」が程度・量・頻度の意味に読み分けられることと同じ方法といえる。このことが「よく」の多義性を成立させているのだが、同時に、この訳語選定の考察は「よく」一語に対して訳語にバラエティはあるものの、いずれも動作の実現レベルが最高レベルが普通以上に目立つものであることという点で共通していることがわかる。つまり、「よく」の意味は形容詞「よい」の意味としてある「十分だ」「基準に合っている」「ふさわしい」という意味を残しつつ、被修飾の語句に合わせてさまざまな意味に訳し分けられるような具体性を排除したものであることが確認できる。

ただし、この方式で訳語を決定する条件としている場合、機械翻訳で生じる問題として次の例をあげている。

(14) [理想式] He often sees movies.

(15) [本方式] He sees a movie carefully.

(※いずれも小倉用例、下線筆者) この問題点の解消には、文脈情報を担う語句を抽出し、その情報を訳語選択に反映させるシステムを組み込むことが必要とされている。なお、ここでは評価副詞としての「よく」は英語に翻訳する際は述語として表現されるべきだとして考察には含まれていないが、日本語の場合は同形の評価副詞にも「よく」が用いられるため、他の程度や頻度の意味とともに統一的な説明ができる文脈情報を探ることが課題となる。

3 類似する他の副詞と「よく」の相違点

3・1 様態副詞や量副詞との相違

未実現の事態に関する修飾に制限のある「よく」だが、「よく」が修飾できる例として「よく考えろ」「よく見ろ」などがある。これらは「じゅうぶんに」「しっかりと」「とことん」などと置き換えられるが、同様に、量的程度をあらゆる「よく」も、「よく」を「たくさん」「たっぷり」に置き換えられるものは未実現の事態を修飾できる。

実際には、佐野(2006)も指摘するように「じゅうぶんに」「たくさん」を使った例で「よく」に置き換えられない場合が多い。

(16) この成績ならあの大学には [じゅうぶんに/*よく] 合格できたはずだ。

(17) 来月にはヒナが [たくさん/*よく] かえるだろう。

「よく」はものごとの実現可能性の度合を限定しない。「合格」は「不合格」との二者択一であり、その間に多様で曖昧な部分も程度の段階も存在しないからである。また、主体や対象の数量を限定しない(佐野 2006)。それらができる「じゅうぶん」「しっかりと」「たくさん」「おおいに」は命令・依頼や意志をあらゆる文末表現との共起制限がない。これは、「よく」が無制限や上限なくといった意味では用いることができないことを示している。

3・2 程度副詞との相違

では、程度副詞との違いはどのようなところにあるのか。その違いは被修飾の語句に差があること(佐野 2006)と程度副詞に修飾されること(佐野 2006、森川 2008)とされる。

程度副詞は相対的な状態性をもつ語句を修飾し、その代表的なものが形容詞・形容動詞など静的な状態をあらゆる語句であり、様態副詞をも修飾することができる。

むしろ動詞を修飾するときに制限がある。

「よく」は「驚く、怒る」などの心的活動動詞、「軽蔑する、尊敬する」などの態度の現れに関わる動きをあらゆる動詞、「効果がある、異なる」などの状態動詞、「争う、ち

らかす」などの否定的な意味を持つ動詞と共起しないか、しにくい(佐野 2006)とされるが、程度副詞はそれらを修飾する。それはその状態の程度が「どれくらい」で測れる段階をもっているからである。程度副詞が量を修飾する場合は、その動きの量が持続時間でも実現度数でも結果量の総体でもかまわない。程度小から程度大へのスケールが設定できることが条件となり、状態に幅のない点的状態のものは修飾できない(工藤 1983)。その意味では常に相対的な状態性をもつ語句を修飾することがわかる。「よく」が上に挙げた動詞を修飾するときは、当該事態の起こる頻度をあらかず場合か、評価副詞となる場合である。

(18) 彼はよく怒る人だ。

(19) 負けはしたがよくがんばった。

形容詞や様態副詞、状態動詞はあることがらの達成ということがなく、頻度の読みはできないので共起しにくいことがわかる。近藤(1986)において、「動作の遂行によって生じる何らかの状態を指向し、『よく』はその状態への接近度の意味合いを含むのではないだろうか」とあることから、事態の実現、動作の遂行ということがキーワードになってくる。

このことは、次のような例でも確認できる。

(20) よく書く。

(21) よく書ける。

(22) よく書けている。

「書く」は動作自体に段階的な程度の進行が頻度以外に認められないタイプだが、「書ける」や「書けている」といった、達成・実現すべき事態を思考してその実現を示す(川端 2015¹²)といった場合には共起する。そのため、状態修飾において無制限に程度段階が上昇して程度スケールに極致が設定できない開放的なスケールを設定する場合には、「よく」が出現しない。

(23) 彼の成長は著しく、チーム内で[非常に/*よく]頼もしい存在だ。

(24) 私は彼のことが[とても/*よく]好きだ。

あくまでも行為や動作の実現が必須であり、それに関する度合を評価するものであることがわかる。

4 「よく」の程度修飾機能

4・1 程度副詞に修飾される「よく」

ここまでに、「よく」は相対的な状態性をもつ語句を修飾して程度が無制限に高いことをあらかずすることができない、その程度や量の段階進行が無制限や上限のない場合にも修飾しない、ということがわかった。しかしながら、「よく」の修飾する動詞も、量や頻度をあらかずない場合は「動詞そのもののあらかず動きが質的に『低い→高い』という程度性・段階性をもっていなければならない(佐野

2006)という性質をもつとされる。では、「よく」のあらかず程度性とは何か。「よく」の修飾するものについても少し見ておく。

「よく」は共起できるが、程度副詞が不自然になるものもある。

(25) すぐに信じないで自分で[よく/*かなり/*非常に]確かめたほうがよい。

(26) カビが生えないように[よく/*かなり/*非常に]乾かす必要がある。

上のような例で程度副詞が出現する場合は、「よく」の置き換えではなく、「よく」を修飾するものとしてのほうがまだいくらか自然に感じられる。その場合、「確かめる」「乾かす」のあり方を示すものとして「よく」は実質的概念性を持つか、「よく確かめる」や「よく乾かす」のセットが一つの行動やある目標となる状態を表していることになるだろう。

4・2 概括量の副詞に接近する「よく」

先ほどの「よく確かめる」や「よく乾かす」は一見、上限のない行動のように見えるが、「納得できるまで(徹底的に)」「水気を残さないくらいの状態(完全)に」を指向してそれへの接近を表している。完全な状態や完成形を指向してそれに限りなく近づいたことを示すという意味では、概括量を示す副詞に接近している(近藤 1986)。また、先にも見たようにスケールの極を志向する高程度を表す程度副詞と置き換えられない。したがって、その程度スケールは両端が完成形に対して実現度0値を出発点として、完成形を最高値とする一方向伸びる閉鎖的な程度スケールである。そして、そのあり方は主観的なものである。たとえば、以下のような発話が可能である。

(27) 本当によく確かめたのか。

(28) それでよく確かめたとは言えない。

(29) もっとよく確かめろ。

上の例は「よく」または「よく確かめる」自体が一つの程度スケール上の値を示していて、ある状態が誰かの完成形だとしても人によって評価が異なるものとなる。そのため、他者の十分だという評価を別の人が不十分だとする見方を可能にしている。たとえば、程度副詞は、「かなり」「非常に」なども評価者やものごと毎にスケール上の厳密な区分は異なるが、スケール上で一定の幅を持って序列通りに並んでいることについては共通認識がある。よって、程度副詞を用いた会話で疑似的な客観性が保てる。語句の序列によって成立したスケールをもとに、序列化された語句の意味を相互に比較することにより、相対的に意味を決定するための尺度感覚を共有している(川端 2012)。

「よく」の場合は、目標への接近をあらかず点で共通認識があり、その相違は完成形のあり方とスケール上で目標

副詞「よく」の評価性について

を実現した認定できる区分のいずれかということになる。ただし、「よく確かめてね」に対して、その「よく」が実際問題としてどれくらいなのか、すなわちどれくらいの接近段階を「よく」でとらえるかに異なりがある。「よく確かめる」とする際の実現のあり方は、あくまで話し手やその発話環境において各自が設定する到達目標ということになるため、尺度感覚の共有はない。

4・3 「よく」のあらわすさまざまな程度

ところで、「よく」は常に完成形への接近度の高さ、到達目標の実現度の高さをあらわすわけではない。

(30) 風でもひいたのか、よく咳が出る。

(31) 最近よく雨が降る。

(32) 彼はよく忘れ物をする。

これらはそれぞれの事態を成立・実現させた積み重ねなので頻度の読みとなる。しかしながら、スケールの最高値が100パーセントや連続しているといった状態だとした場合、「よく」で表される頻度がそれに限りなく近いものをいつも指定しているとは限らない。すなわち、この「よく」は「ときどき」「たびたび」「しきりに」など置き換えることができ、高頻度から中頻度までをカバーしている。しかも、客観的な数値ではなく、そのような印象をもつだけの場合もある。次のような比較しての位置づけもできる。

(33) 今月は例年に比べてよく雨が降る。

(34) 失恋を引きずっているのか、ここのところいつもよりよく忘れ物をする。

これらは目立ち度・刷り込み度が反映した主観的なありかたであり、「一定以上、ふつうよりは」といった傾向を述べているものである。完全や完成形を目指していない「よく」もあることが確認できる。

4・4 否定と共起する「あまり」との関係

「よく」と程度副詞は度の限定方法ものが異なる。程度副詞は相対的な状態性が存在しない否定の事態を修飾することができない。したがって、「～ない」などの否定的事態には「あまり」や「全然」などを用いる。程度副詞を対象の状態についての評価尺度として用いたアンケート調査の選択肢として「非常に思う／かなり思う／少し思う／あまり思わない／まったく思わない」などのランクの構成もそれをあらわしている。ただし、中間にある「少し思う」と「あまり思わない」は評価者の前提が肯定的か否定的かによって容易に交替するとされる(小野寺 2002¹³⁾)。評価時点での期待の大きさによって評価が分かれるというものである。評価者の判断は評価時の基準が反映するため、対象への評価は評価者の期待を知る指標となり、対象の状態の客観的な判断にはならない。

「よく」は「非常に」「かなり」と交代する可能性があるが、それらとともにそれらに修飾されて用いられることも多い。その意味では「よくP／あまりPない」のように「あまり～ない」「ぜんぜん～ない」と対立した位置づけにあり、両者の間に「どちらでもない・ふつう・ときどき」などの中間レベルがあると考えられる。この中間レベルは十分にといえるほどではないと感じれば「あまり」に近づき、一定レベルをクリアした状態となれば「よく」に近づく。頻度、量、質のいずれの評価においても、「あまり」は「よく」を修飾する「あまりよく」としても使用できるため、実際には評価者は、対象となる事態が到達目標に対して十分か不十分かのいずれかの評価を下していることになる。

したがって、相対的な状態性のように語句の意味それ自体には段階的な状態の進行はないものは、到達するレベルを設定できないので、状態の進行を評価するためには到達目標といくつかの状態を相対的に区分する装置(道具)が必要になる。先にも述べたように、程度スケールに配置されて区分を表示する程度副詞は、程度副詞を選ぶことによって、ある状態が相対的にどの段階に位置するのかが指定することが可能である。他方、「よく」は常に基準との個別評価であり、そのような序列を構成する要素ではない。

「よく」を用いて他の事態と比較して相対的な評価を述べる場合は、程度副詞や比較の意味をあらわす語句が必要になることもそれを示している。

4・5 「よく」の程度評価の特徴

以上のことから、「よく」のあらわす程度の特徴として以下の3つのことが分かった。

- ① 「よく」とその被修飾の内容は、あることからの実現や完成形を目指した中で話し手の想定する到達目標である。
- ② 「よく」はあることからの実現度 0 値と実現した状態を両極としたスケールにおいて、基準とする設定した到達目標の実現度の高さを評価する。
- ③ 「よく」は到達目標として完成形を目指しつつ、実現度を測るスケールで到達目標をあらわすため、一定以上のレベルに達したときに、「よく」を用いることがある。

「よく」は、ある事態の実現度や事態の生起度数に関する 0 パーセントから 100 パーセントという閉じたスケールを用いて程度限定をするものであった。また、その到達目標は 100 パーセントの値と十分と認定される一定レベルの二つがあり、前者への接近と後者の実現や生起において「よく」が用いられる。そのため、無制限の程度の大きさをあらわす程度副詞には置き換えられない。また、程度副詞はその語句を使い分けることによって相対的な状態性の語句

の程度段階を限定できるが、「よく」は事態そのものが段階的な進展性を持たないものとは共起しにくい。そのため、動作によって実現される状態が段階的に進展するとき、その進展度を測るスケールにおいて完成形を到達目標とするときは完成形への接近を、普通レベルを判断基準とする場合は認定に十分な値の実現として表示される。

5 「よく」の評価副詞としての機能

5・1 評価副詞「よく」の性質

森本(1992)では、評価副詞的に用いられる「よく」の特徴として、「よく」の意味を否定する「あまり」が出現しないことをあげている。たとえば以下のような例である。

(35) よく勝ちましたね。 ※森本用例 37a

(36) *あまり勝ちませんでしたね。 # 37b

頻度や程度量の「よく」は「あまり」で否定したり、「あまりよく」として否定したりするが、否定の「ない」は修飾先にはならない。

(37) よく確かめた。

(38) あまり確かめなかった。

(39) (あまり)よく確かめなかった。

一方、評価副詞「よく」は次のように否定の内容の文全体を修飾することができる。

(40) あまり雨に降られなかったね。

(41) よく雨に降られなかったね。

「よく」は否定の内容「雨に降られなかった」全体を修飾して「よく」と評価・認定している。頻度や程度の「よく」は「よくP」が一つの属性として捉えられれば命令・依頼文などの未実現のことを表す文末にも出現するが、評価副詞の「よく」はそのような未実現の事態を修飾しない。これが評価副詞である理由とされる。しかしながら、否定的な内容も肯定的な内容も修飾する。ある事態の出現とそのあり方に対する評価ということになる。評価の意味としては賞賛・褒めという肯定的なもの、驚き・呆れという否定的なものがあるが、この意味を規定するのにも文脈情報が必要となる。次の例のように、文脈情報としての発話の前提の違いが意味の違いとなって現れる。

(42) よくがんばるね。

この文は「みんな君のまじめさに頭が上らないよ」という続きがあれば肯定的な評価になるが、「君ががんばるからこちらががんばらないといけなくなるから困る」という続きがあれば否定的な評価になる。

5・2 評価副詞「よく」が出現する文脈情報

ここで文脈情報が「よく」の意味を決定するという点についてあらためて考えてみたい。近藤(1986)の指摘す

る「共起動詞の性質だけがその意味を一意的に決定しはしない」ということや、2・2の翻訳後選定における問題とも関係しているため、見直しておく。これまでも見たように、次の「よく」の意味は文脈から特定する必要がある。

(43) 彼は映画をよく見ている。今月もう 20 本も見たい。

(44) 彼は映画をよく見ている。ちょっとした編集ミスも見逃さない。

二つの例は、「映画をみる」という事態が実現する状態を回数と丁寧さや注意深さのいずれのスケールをとるかという相違であって、そのスケール上で設定された程度を基準としているということには変わらない。これに加えて、次のような例も文脈から意味が決定される。

(45) 彼はこんな映画をよく見ているね。僕なら凄惨な場面が多すぎて気分が悪くなるよ。

「詳しく」や「じっくり」という意味にとれなくもないが、その映画を見ている彼に対する驚きや呆れといった話し手の心情が読み取れるとすれば、「よく」は評価副詞となる。

では、ここでの意味を規定する文脈情報とは何か。それは発話の場面にある発話環境であり、それが文中に示された後続の内容であることは先にも述べた通りである。上の二つは、「彼は映画をもう 20 本も見たい」「彼はちょっとした編集ミスも見逃さない」のように、「よく」の意味を文中の内容に置き換えることが可能である。「よくP」と評価した具体的なあり方Pを程度の一段階として示すことができるからである。しかしながら、(44)は「よくQ」の示す程度段階Qは示されていない。ただ「彼は見ているが、僕は見られない」という対になることがらを取り出すことができるのみである。このような二つのことがらの相対的に捉えられた比較による差の大きさをとらえることも程度評価の一つである。それは、「ずっと」などの複数の対象を比較する程度副詞から想定できる。

5・3 前提と結果の開きに働く心理

もう少し評価副詞とされる「よく」の例を見てみよう。

(1) こんな雨の中をよく走る！

(10) さぼってばかりなのによくレギュラーからはずされないね。

(1)では、「雨の中では普通は走りたくない」、(10)「さぼっていれば普通はレギュラーからはずされる」といった発話時の前提がある。予測は否定的なもので結果は肯定的な内容であり、発話者の心情は肯定的とはいえない。驚きや呆れといった意味と捉えられる。このとき、文の形式が否定的かどうかは関係ない。

賞賛や褒めの場合はどうか。

(9) よくこんな遠いところまで来ていただきました。

副詞「よく」の評価性について

(46) 旅行中、よく雨に降られなかったね。

(9) では「来るのはいへんで来られなくてもしょうがない」、(46) では「雨に降られる可能性はじゅうぶんにある」という否定的な前提があつての肯定的な結果となり、発話者の評価は肯定的である。「よくQ」のQは「Qではない」というマイナスを起点としてQが実現した段階でプラスに転じる。つまり、否定的な前提があつた時点で、肯定的な結果の程度には関係なく困難な状況の実現というレベルを達成することになる。認定できる一定レベルの達成が「よく」の評価対象となり、前提との開きが大きければ驚きや呆れや賞賛はそれに伴い大きくなる。心情を裏切る幅が大きくなることを意味するからである。

先の二つのタイプの違いは、発話者が何を期待しているかである。前者は前提のほうを期待して望ましいと考えているが、後者は結果のほうを期待して望ましいと考えている。つまり、「否定的な前提+肯定的な結果+否定的な前提を望ましいとしている」前者は驚きや呆れ、「否定的な前提+肯定的な結果+肯定的な結果を望ましいとしている」という後者は褒めや賞賛となる。

5・4 期待や前提と連動する「よい」の意味

たとえば、同じ「いい(よい)」が評価する意味と否定的な意味で用いられる。

(47) それ、いい。

だれかの提案に賛同するときには、「いい」は肯定的な評価となるが、提案や依頼を断るときには「必要ない、いらぬ」といった否定的な意味となる。後者は十分なレベルに達しているということの表明がこれ以上のものを必要としないことをあらわすため、実質的に拒否となっている。相手に思いが通じなくて「もういい」と言うのも、十分なレベルにすでに達したということの表明という意味では同じと考えられる。発話時の対象に期待ができなければ否定的な意味が生じる。

また、「いい加減」や「適当」のように否定的なほうに意味の幅が広がるものがあるが、これは適格であることや基準にかなっていることを表示するものであり、前提や期待の程度の高さに応じて「よい」のレベルが変わることと関係していよう。程度の高さを望まなければそれ相応の低さで、高いことを望んでいればそれ相応に高くなるということである。これらの現象との関連についての考察は稿を改めたい。

6 むすび

以上、副詞「よく」の多義性を生み、意味の幅を生じさせているとされる評価性について考察してきた。それらを通して以下のことが明らかとなった。

- ・ 「よく」の基本的な機能は動作の実現の度合を測る程度評価である。
- ・ 「よく」の程度評価は、動作の遂行によって段階的に0から目標値へと進展する状態をあらわすスケールを用い、到達目標を対象となる事態が実現していることを基準にかなっているとして評価するものである。
- ・ 対象となる事態と到達目標とを比較しての評価であるため個別的で尺度感覚の共有はない。したがって、程度を共有することができるのは、基準を共有できるときである。
- ・ 評価副詞は程度スケールが「Pでない」からPであることに向かうスケールを用い、前提や期待との関係から意味が決まっている。以上をまとめると、以下のようになる。

意味	程度	量	頻度	評価
使用するスケール	0値→P	0値→P	0値→P	-P→0→P
目標値 Pの意味	完成形 / 一定レベル	一定のレ ベル	一定のレ ベル	実現困難 なレベル
基準	目標値P	目標値P	目標値P	目標値P
前提	特になし	特になし	特になし	-P
期待値	目標値P	目標値P	目標値P	-P/P
評価性	目標の実 現=評価 の高さ	目標実現 の認定	目標実現 の認定	期待-P (呆れ) 期待 P (賞賛)

程度修飾機能を持つ他の副詞句についてもこのような前提・期待・基準と程度スケールで見直すことで、程度評価のありかたの全体像を見ていくことは、十分に有効な視点であると考えている。

- 1) 近藤仁美：多義の副詞「よく」についての考察,国語学研究,26,100-89,1986
- 2) 森本順子：副詞的機能とモダリティー「よく」について,京都教育大学紀要A,80,71-79,1992
- 3) 森川結花：頻度の副詞「よく」をめぐる一文末表現との共起制限を通して見られる「よく」の素性一,大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告,15,21-34,2008
- 4) 宮島達夫：語彙論研究,むぎ書房,1994
- 5) 佐野由紀子：ありかたに関わる副詞としての「よく」について,日本語文法の新地平1 形態・叙述編(益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編),くろしお出版,157-177,2006

- 6) 仁田義雄：副詞的表現の諸相,くろしお出版,2002
- 7) 工藤 浩：程度副詞をめぐって,副用語の研究（渡辺実編）,明治書院,1983
- 8) 川端元子：程度副詞を分類する視点の考察,愛知工業大学研究報告,47,115-124,2012
- 9) 川端元子：聞き手への行為要求表現と程度副詞—共起制限理由の再考—,名古屋大学国語国文学,84,2002
- 10) 西尾寅弥：形容詞の意味用法の記述的研究,国立国語研究書報告 44,1972
- 11) 小倉健太郎・Francis Bond：日英機械翻訳における副詞訳語選択について,情報処理学会第 56 回全国大会予稿集,1998
- 12) 川端元子：アスペクト形式「ている」を伴う可能動詞の意味と特性,愛知工業大学研究報告,50,2015
- 13) 小野寺典子：「非常に」と「かなり」で異なる回答 — 国際比較調査における選択肢表現の検討,放送研究と調査,52(1),2002

(受理 平成 28 年 3 月 19 日)